

【連載】

日中学術交流の現場から 第十一回

北京からゴジラ同級生俳優、宝田明さんへの手紙(第二便)

山口直樹

(北京日本人学術交流会責任者、市民科学研究室会員)

はじめに

拝啓 宝田明さま

前回は、宝田さんへの手紙の中でハルピンでの経験から「ソ連への憎しみが消えない」と語っていた宝田さんとソ連訪問記を書いたアンドレ・ジッドを最後に取り上げました。

この手紙を宝田企画の事務所に送ったのが、2022年3月10日のことでした。

いつもならすぐ電話がかかってくるのに、今回、電話はなかったのに、「どうされたのかな」とは思っていました。宝田さんが、3月14日になくなったという訃報を目にしたのは、その一週間ほど後のことです。そしてロシア軍が、ウクライナ侵攻を開始したのはそのちょうど20日ぐらい前の2月24日のことでした。本当に21世紀の出来事なのかと疑いたくなります。

このとき宝田さんは、すでに具合がよくなかったのです。一年前、電話で話をしたときは、あんなにお元気そうでしたのに。享年87歳でした。

前回、手紙の中で宝田さんのことを「『ゴジラ』(1954)関係者のなかで「最古の生物」と書きましたが、すでにそうではなくなってしまったことが、私には、残念でなりません。ついに私が、考えていた宝田さんを北京に招いて講演してもらうという企画は実現できなくなってしまいました。

宝田さんが亡くなる、直前に世によく知られた人物が89歳で亡くなりました。

東京都知事を務めた石原慎太郎氏です。私は以前、「怪物の時代におけるゴジラと石原慎太郎について」という小文を『葦牙ジャーナル』という雑誌に書いたことがあるのですが、3月10日に送った最後の手紙では、石原慎太郎の死に触れておきました。

思えば、宝田さんと石原慎太郎の関係も不思議な縁であるように思えます。

宝田さんは『接吻泥棒』(1960)という映画に出演されていますが、それは石原慎太郎と雑誌で対談したことがきっかけだったそうですね。

宝田さんは『送別歌』(ユニコ舎, 2021)で以下のように書いています。

「逗子のお坊ちゃん、超名門の一寸橋をでているし、俺なんかとは違うだろう。」とこの対談の時までは、慎太郎さんのことをそのように見ていました。大学在学中の 1955 年に「太陽の季節」で芥川賞を受賞し、颯爽と文壇に登場した人ですから厳しい暮らしを生き延びてきた苦労人の自分とは、住む世界が違っていただろうと思ったのです。ところが対談でお会いしてみると私の満洲からの引き揚げの話を実情なまなざしで聞いてくれる人で後日、その時の様子を丁寧に記事にしてくれたのでした。私はこの時初めてこころの奥底にかかえつづけて来た引き揚げ者の引け目みたいなものから解放されたような気がしました。

聞いてもらえたこと、わかってもらえたことが嬉しかったですね。」(178-179 頁)

私は、その対談は、読んでいませんが、これはちょっと意外でした。

憲法において石原慎太郎とは対極的なスタンスをとる宝田さんが、そういう対談をしていたとは……。石原慎太郎は、もともと東宝の社員でもあったのでしたね。

宝田さんは、ゴジラと憲法の関係性を研究する和歌山信愛大学の先生である伊藤宏氏に自分から電話して対談を申し込まれたのだそうですね。第五福竜丸展示館の市田真理さんが、教えてくれました。これはちょっと尋常ではないですね。よほど自分の方向性と似たものを感じ取られたのでしょう。その伊藤宏氏は、市民科学研究室で 2021 年 4 月 19 日に行った私の「市民科学者のためのゴジラ入門」に参加してくれました。

石原慎太郎を追悼する気は、起きないのですが、『ゴジラ』(1954)関係者の宝田さんを追悼しないわけにはいきません。

ここ一年でゴジラや第五福竜丸に関係の深かった宝田さんや大石又七さんを亡くしたことには痛恨の思いがします。その喪失感は大いですが、宝田さんの追悼にかえて第二便を書くことにします。

1. ロシアのウクライナ侵攻をめぐって

私が、前回の原稿を脱稿したのが、2 月 10 日、その後に 2 月 24 日にロシアのウクライナ侵攻が始まりましたので、この点について焦点を当てて書いてみたいと思います。

正直言って第一便を脱稿した時は、このような状況になるとは思っていませんでした。

ここでは前回いっていた予定を少し変更します。

お送りしていましたアンドレ・ジッド『ソヴィエト旅行記』(光文社 2019)のことについて第一便では言及しましたが、このロシアのウクライナ侵攻が始まった状況で日本人が、改めて読むべき本としてこの本をあげたいと思います。

というのは、まずは日本人のロシアに関するユートピア幻想をこの書によって確認することが重要かと思われます。ジッドは 1936 年の旅行記のなかでは以下のように述べています。

「赤の広場はその前にも見えていた。数日前のゴリキーの葬儀のときである。ロシアの民衆を私はすでに見ていたのだ。けれども、この同じ民衆がその時は全く違っていた。

むしろ私の想像だが、帝政時代のロシアの民衆に似ていたのではないかと思う。ゴリキーの棺の置かれた祭壇の前で、広い柱の間を、長々といつ果てるともなく行進していたあのときの民衆は、ソビエト人民を代表する最も美しく最も力強く、最も晴れやかな人々ではなかった。そうではなく痛ましげで、女性やこども、ときには老人をも含む「そこいらの人」

だった。ほとんど身なりが貧しく、哀れにも見える人々だった。静かで陰鬱で内省に沈んだ行進だった。過去からやってきたように見えたその行進は、完璧な規律の中で確かにもう一方の行進、栄光に満ちた行進よりもはるかに長く続いた。私自身、それをとても長い間ながめていたのだ。あのすべての人たちにとってゴリキーとはなんだったのか」(39 頁)

ここで重要なのは、赤の広場にゴリキーの葬儀の時に集まった民衆をジツドが、帝政時代の民衆に似ていたのではないかと述べていることです。

ジツドが、1917 年 10 月のロシア革命以前にもどってしまっていることを感じ取っていたことが重要だと思われます。すなわちこのときすでにロシアには、ロシアの民衆の人権を抑圧する強固なスターリン政治体制が成立していたのでした。

しかし、当時、ジツドは、左派から激しいバッシングにあっていたのでした。全世界の労働者の指導者スターリンに疑問を呈するとはけしからんと。

一方、この状況でソ連に期待を寄せていた劇作家がいました。

東宝の特撮映画や映画『第五福竜丸』にも科学者の役で出演していた千田是也氏が、日本語訳を出していたベルトルト・ブレヒトが、その人です。1930 年代後半の時期は、ファシズム支配と帝国主義戦争によってだけ特徴づけられるものではありませんでした。これに対抗する最も強力な現実的拠点と考えられたソ連において建設の進展と政治的退行にかかわる内部矛盾が深まりつつある時代でもありました。

1917 年のロシア革命後、1918 年にドイツで革命が生じましたが、1921 年にはドイツ革命の敗北は決定的となり、ヨーロッパ革命や世界革命への展望は失われていきました。

ブレヒトは、このヨーロッパ革命の敗北後にソビエト連邦が「一国社会主義」建設の路線を歩んだことを必然的な過程だと認識していました。この点は、レーテ(ソビエト)運動にかかわったブレヒトの師であったコルシュとは違って 1920 年代には、コルシュのようにソ連を「赤色帝国主義」と批判したりはしませんでした。

ブレヒトは、1920 年代からソ連の発展の積極面をより評価していました。

1933 年にドイツがナチズムに支配されるのを目撃し、ナチズムの根源が資本主義社会内部に存在することを認識していたブレヒトには、反ファシズム運動の具体的な拠点は、ソ連においては考えられなかったのでした。けれどもブレヒトは、のちにその楽観的な姿勢を変更させざるを得なくなっていくます。

こうした状況の中、ジツドに好意的な反応を示した一人にステファン・ツヴァイクという主にオーストリアで活躍していた作家がいます。

ツヴァイクは 1936 年 12 月 5 日付けのロマン・ロラン宛の手紙で以下のように書いています。

「アンドレ・ジツドの『ソ連から帰って』を読んだところで私は大いに満足です。ご存じのように、私は彼の地で起こっていることのすべてを一括して受諾する点であなたについていくことはとうていできませんでした。プラハのある委員会がだしているジノヴェエフ裁判の小冊子を読みましたが、それは明らかに反論の余地はなく、多くの自白はでっち上げられたものであることを示しており、たとえば、セドウ=トロッキー息子は決してコペンハーゲンへ行ったことはなく、あの有名な会合は決して行われませんでした。私は反動からトロッキーに与するものではありません。—彼には口をつぐむ偉大さはなく、彼の出版物は非常に有益、あまりにも有益でした！」(233 頁) 『ロマン・ロラン全集手紙往復書簡 38』(みすず書房 1983)

これに対してロマン・ロランは、1936 年 12 月 9 日「私はスターリンを高く評価します。彼が包まれている彼の肖

像や香りの煙は好きではありません。しかし、彼自身は単純で荒っぽくさえあり、いささかもお世辞やお世辞家たちを好みません。あわれなジッドがしたように彼には《最高指導者》等々のようにしか声をかけられないと主張するのは愚かしいことです」(235 頁、『ロマン・ロラン全集手紙往復書簡 38』みすず書房 1983)と応じていました。

ロマン・ロランは、アンドレ・ジッドが参加したゴリキーの葬儀にも参加していました。もっともこのゴリキーの死には、不審なところが多いともいわれていますが、はっきりしたことは今もよくわかってはいません。

この時点でロマン・ロランは、スターリンにかなりのシンパシーを持っていたようです。

ロマン・ロランは、反ファシズムの作家といわれますが、反スターリン主義の作家とは言えないように思われます。

これに続きツヴァイクは、1937 年 3 月 4 日付けのロマン・ロラン宛の手紙をロンドンから出していました。それは以下のようなものでした。

「教科書について挿絵付きで各民族で書かれた全コレクションを私は見ました。これらは技術的に見事です。何冊かお送りしますから、スターリンがすでに六歳の児童期の全く初歩の本に姿を見せるのをご覧になるでしょう。集団的事業としての「革命」の理念が消え失せて、イタリアではアビシニア《戦争》以来そう信じさせられているように、指導者の個人的天才が小麦を成長させ、太陽を輝かさせるといった新しい見解に席を譲るべきではありません。我々は、政治家の神格化の時期を通過していますが、民衆をいささか単純化しすぎ、愚鈍化するこの迷信を、いささか修正するのは、私たちの義務だと信じます」(237 頁)

「友よ、なんと不幸でしょう。目下起こっている一切のことは、スターリンが最良の将軍たちを《スパイ》や《裏切者》として銃殺していることは、あなたは私の観点をご存じです。ゲシュタポであれ、チェカであれ、警察が支配するすべての国は私にとって疑わしく耐えがたいのです」(238 頁)

私は、これらの手紙を紹介することをとおして単なる昔話をしたいわけではありません。

現在起こっているロシアのウクライナ侵攻という事態に対して、その要因を NATO の東方拡大やアメリカやネオナチなどの外部の問題に帰着させることはできないということをここで言うておきたいのです。「多様な視点」の名のもとに「悪の相対化」や希釈を図ることは事態をさらに悪化させるでしょう。ましてや私と近いと思っていた人が、根拠のない陰謀論めいた発言をしていることに私は、驚いています。これでは信用を落とさざるを得ないでしょう。「ポーランドやウクライナなどの首をしめることを大ロシア人の「祖国擁護」と呼ぶような、このような奴隷は……下司であり下郎である」(『帝国主義と民族・植民地問題』所収「大ロシア人の民族的誇りについて」(10頁、レーニン 川内唯彦訳 国民文庫 1966年第13刷)をかみしめる必要があると思います。

ウクライナ侵攻を行っているプーチンは、KGB 出身でレーニン否定の大ロシア主義者です。この大ロシア主義者をウラジミールと呼んで「まもなく北方領土は帰ってくる」と言っていた元首相がいましたね。NHK の番組に出演した宝田さんが、「戦争をするような政治家に票を入れるべきではない」と言った時、アナウンサーに発言を止められましたが、そのとき確実にこの首相のことが念頭にあったものと想像します。これは、『日曜討論』という NHK の番組で「おじいちゃんの代から CIA」と発言して「テーマに沿った発言をしてください」と NHK の司会者から発言を止められた黒川敦彦とは、かなり意味合いが違ったもののように思われます。

NHK といえば、2022 年 1 月に放送したドキュメンタリーで「東京オリンピックに反対していた人たちは金をもらってデモしていた」という意味の発言を字幕付きで流しました。

これは事実に基づかないデマ放送であることは明らかです。しかもネット番組ではない国民から集めた金で運

営する NHK で行われたことであることは、NHK の存続にかかわるほどに大きな問題だと考えています。

その時、このドキュメンタリーを監督していたのが、この首相とも親しいという河瀬直美氏でした。

河瀬直美は、2022 年 4 月に東京大学で行われた入学式で祝辞を述べ、その中で、「ロシアを一方向的に悪だとするのは簡単だ」と語りました。この発言は、多くの国際政治学者などから批判を集めました。そもそも東京大学は、なぜ東京オリンピックに関して問題あるドキュメンタリーを監督していた人物を来賓に選んだのか。もっと他にふさわしい人は、たくさんいたはず。この東京大学の人選自体に私は、首をかしげざるを得ませんでした。

ともかく宝田さんが、ハルピンで経験されたことは、そしてそれを記録に残されたことは今日でも意味を失っておらず、ロシアがウクライナ侵攻を開始した現在、より大きな意味を持ってきていると私には思われます。

2. 『ゴジラ』(1954)の山根博士のモデルとなったと考えられる科学者

宝田さんが出演された『ゴジラ』(1954)の科学者についてモデルになったと思える科学者がいるのでその科学者のことについて書いてみましょう。

『ゴジラ』(1954)には原作の香山滋が書いた検討用台本「G 作品」が存在していました。さらにそれは準備稿「G 作品」、村田武雄、本多猪四郎へと、そして最終決定稿「ゴジラ」村田武雄、本多猪四郎→完成作品「ゴジラ」監督、本多猪四郎、特撮監督、円谷英二へと改稿していきます。

G 検討用台本(香山滋)においては、化学者、芹沢博士は以下のように書かれています。

「年齢 40 歳、元北京大学教授、薬物化学者で山根恭平とは親交が深い。嘗て、大学の休暇を利用して熱河省へ山根が化石採掘に行ったとき、助手として同伴。狼におそわれた危い間際を山根恭平に救われたので山根を命の恩人と思っている。その際、片目を失い、顔半面ひどい傷のヒツツリで醜い。妻は数年前病死、ひそかに恵美子を慕っているがあきらめている。恵美子もそれはうすうす知っている。今度は空中酸素破壊剤を完成させて見せる」と思っている。

「G 作品」準備稿(村田武雄、本多猪四郎)のほうになると、

「年齢 30 歳、薬物科学者。山根博士に愛され、密かに恵美子を思っているが、戦争で片目を失い顔反面に鋭い傷をおっている。」

という設定です。

G 検討用台本(香山滋)では志村喬演じる古生物学者、山根博士は、

「年齢 55 歳。元北京大学教授。東京湾にほど近い高台に居を構える。あまり豊かではない。研究のことになると気狂いになるほどの偏執狂。娘の恵美子には、世間並みの父親。ゴジラが水爆によって生まれたことを公表することで世界が混乱することを恐れる。神経痛の持病のため大戸島に調査にはいかず。」

という設定ですが、「G 作品」準備稿(村田武雄、本多猪四郎)では、「年齢 55 歳、元北京大学教授」の記述はなくなっています。古生物学の権威という設定ではありますが、神経痛で大戸島の調査に大戸島の調査に参加しない記述はなし。「変わり者の科学者」から「庶民的な科学者」に性格を変えています。

ここにてでくる熱河省ですが、原作が書かれる前の 1932 年から 1945 年まで、満洲国の一省だった地域です。中生代の地層が発達し、淡水産魚類、甲虫類、淡水産甲殻類、植物の化石など多くを産出することで知られ、清の乾隆帝も化石を発掘していました。

1945 年以前における日本人地質古生物学者の恐竜体験には、1934 年、樺太の川上炭坑地内から発見された日本竜 が有名ですが、これに続くものとして満洲国の恐竜はありました。日本竜の研究にたずさわった北海道帝国大学理学部地質学鉱物学教室創設教授・長尾巧は、東北帝国大学理学部地質学古生物学教室創設教授・

矢部長克の門下であり、満洲国の恐竜研究も矢部一門の遠藤隆次、野田光雄、鹿間時夫らによって進められていました。

博物館の学芸員だった犬塚康博は「ゴジラ起源考」(『千葉大学人文社会科学研究所』(2016))で「1930年代から1940年代前半は、日本の地質学古生物学における恐竜研究の高度成長期だったのである。」と指摘しています。

また、満洲国との関連を示してあまりあるのが三葉虫でした。1954年以前、1930年代および1940年代における日本人地質古生物学者で、古生代研究、三葉虫研究の第一人者のひとりに遠藤隆次がいました(※)。

※ 補説:「満洲国」で古生物学研究を行った遠藤隆次

1892年生まれの遠藤は、1924年に東北帝国大学理学部地質学古生物学教室を卒業すると、「満洲」にわたって南満洲鉄道株式会社(以下、満鉄)立の撫順中学校教諭となり、後20余年におよぶ満洲・中国生活を開始する。1927年に満洲教育専門学校教授、1929年4月から1931年6月までのスミスニアン・インスティテューション留学をはさんで、1933年には満鉄教育研究所教授となる。

1939年、満洲国中央博物館(新京)学芸員となる。

同所は、1937年12月1日、満鉄附属地行政権の満洲国移譲によって地方部とともに廃止され、同所附属教育参考館も1938年5月1日に満洲国に移って、館長の遠藤はこれにともなった。同館は国立中央博物館準備処となり、新京移転後の1939年1月1日に国立中央博物館官制が施行された。

遠藤は、満洲国終焉まで同館自然科学部長の地位にあり、敗戦後は1946年8月から1948年6月まで留用されて奉天の東北大学教授を務めたのち、引き揚げている。

遠藤の満洲古生代研究は、満鉄に所属した時代に集中しておこなわれていた。引き揚げ後は、1954年から埼玉大学学長として学術行政にかかわっていた。

『ゴジラ』(1954)の山根博士は、古生物学者、遠藤隆次をモデルにしていた可能性がある。原作の探偵作家、香山滋は、地質学、古生物学に詳しい人だった。おそらく遠藤隆次のことは知っていただろう。『ゴジラ』における三葉虫や恐竜の化石は、日本の満洲植民地科学の「成果」の一つとみなすことも不可能ではないだろうと思われる。なお、遠藤隆次の出身は、福島県須賀川市、すなわち円谷英二氏と同郷でもあった。

私は、市民科学研究室の連載『仮面ライダーと市民科学』で『ゴジラ』(1954)や『仮面ライダー』(1971)にかかわった原作者やスタッフに東北人が多かったことを指摘したことがある。宝田さんも中国東北部のハルピンそして新潟県村上市にかかわりの深い東北人だと思われる。

東北帝国大学理学部地質学古生物学教室出身の鹿間時夫は、戦前、新京工業大学教授を本務とし、1942年10月1日までは国立中央博物館の嘱託、それ以降同館兼任学芸官を務めた人であった。熱河竜の足跡化石を師・矢部長克らと報告し、国立中央博物館学芸官・野田光雄とともに現地におもむき収集をおこなっている。戦後は、横浜国立大学教授。ゴジラ映画の監修を行ったことでも知られている。「満洲国」の恐竜研究は、まだまだ研究の余地があるように思われる。

3. ゴジラ映画における「科学とジェンダー」という問題

アメリカの文芸批評家のフレドリック・ジェイムソンは、ブレヒトの言葉を連想させる著書『のちに生まれる者たち

『ポストモダニズム批判への途 1971-1986』(紀伊国屋書店 1993)に所収された 1971 年の論考で以下のように書いています。

「科学者の研究室(研究所の規模にまで誇張された自宅内工房、工場と診察室を結合させたもの)や、夜ごとの仕事ぶり(決まりきった日課や 8 時間労働には拘束されていないということ)にはどこか魅力的なところがある。科学者のきわめて知的な作業もまた、知識階級以外のひとが頭脳労働や書物から得た知識とはたぶんこんな感じだろうと想像するものの戯画となっている。さらには昔ながらの形態をとる労働組織、より個人的で、心理的により充実感のあるギルド世界への回帰が見られる。

そこにあっては、年配の科学者は親方で、若い方の科学者は弟子ということになる。

また老学者の娘は、「申し分なく自然に」機能の移行の象徴となる。そういった具合に、特徴を無限に列挙し、豊富にしていくことができるだろう。

私が伝えたいと思うのは、このような特徴のいずれもが、科学そのものとは無縁のものであって、単に疎外されたものも疎外されていないものも含めた、労働にかかわる 1950 年代の男性の感情と夢の、ゆがんだ反映に過ぎないということだ。」(43-44 頁)

ここでいう「年配の科学者」というのは、志村喬演じた山根博士、若い科学者は、芹沢博士ということになるでしょう。またジェイムソンは、こうも言います。

「ここでは科学者との同一化は、筋の主導力ではなく、その必須条件にとどまっている。

この象徴的な満足感は、あたかも物語の中の出来事ではなく、そもそも物語が生じるためには絶対に欠かすことのできない例の枠組み(科学の世界、分子の分裂、外宇宙を凝視する天文学者の視線、そしてむしろ、なにか父権的なギルド制度のようなもの)に愛着をいただいているかのようなのだ。このようなパースペクティブから見ると、サイエンスフィクション的な物語につきものの激越な異変-崩れ去る建築物、東京湾から出現する怪獣たち、包囲攻撃と戒厳令-は口実に過ぎない。それはもっと深層にある働きと幻想から精神の方向をそらし、それらの幻想そのものを動機づける役割を果たしている。」(44 頁)

「崩れ去る建築物、東京湾から出現する怪獣たち、包囲攻撃と戒厳令」この部分からもジェイムソンが、『ゴジラ』(1954)のことを論じているのは明らかです。

私が、ここで問題にしたいのは、「この象徴的な満足感は、あたかも物語の中の出来事ではなく、そもそも物語が生じるためには絶対に欠かすことのできない例の枠組み(科学の世界、分子の分裂、外宇宙を凝視する天文学者の視線、そしてむしろ、なにか父権的なギルド制度のようなもの)に愛着をいただいているかのようなのだ。」と述べている部分で科学者の世界にある家父長制的な世界や価値観のことです。

もう少し具体的に言えば、古生物学者、山根博士の娘、山根恵美子(演:河内桃子)は、尾形と恋愛関係にあり、化学者、芹沢博士が、思いを寄せている女性でした。

『ゴジラ』(1954)は、恋愛の三角関係を扱った映画でもありますが、たいていの場合、科学者の娘が登場してくる映画の原型でもあります。

なぜ「科学者の娘」なのでしょう。ゴジラ映画は、防衛隊のち自衛隊の制服組が、活躍する男性中心的な映画ではありますが、中心的な役割を演じる科学者の子供は、たいてい女性なのです。なお共演された女優、河内桃

子さんは、理化学研究所の所長を務めたことで知られる大河内正敏の姪でもありました。ここに「科学とジェンダー」という問題があるのではないかと私は感じています。それを宝田さんと論じあいたかったのですが、それがかわなくなかったのは、本当に残念です。



2013 年中央财经大学における北京ゴジラ行脚にて

4. 俳優、宝田明と人間、宝田明

映画評論家の町山智浩さんは、よく『ゴジラ』(1954)を論じるときに平田昭彦演じる化学者、芹沢大助が、戦前の経験をひきずり、苦悩していたのに対し、山根博士の娘、山根恵美子と恋愛における三角関係にあった南海サルベージの尾形を戦後派の快活な青年を「チャラチャラしている」と揶揄していました。しかし、これはあくまで役の上の話で、俳優、宝田明の演技とみななければならないでしょう。実際の人間、宝田明は、戦前の引き揚げ経験をずっとひきずって生きてきた人でもあるということを忘れてはならないと思います。

宝田さんは『ニッポン・ゴジラ黄金伝説』(扶桑社 1998)で書いています。

「まだ 20 代の前半。社会人としては駆け出しである。その若者が曲がりなりにも大東宝の顔になったのだから、責任重大だ。王子にあるある近所の銭湯に行けば、いろいろな声をかけられる。あれ観たよ!とか、今度の映画よかったね! しっかりな! など親しいというわけでもない人から、温かい励ましをいただくことが多かった。

その反面、末っ子の宏は、宝田明の弟だということではしばしばいじめられることがあったという。ねたみ、そねみ、反感……。いじめるほうにも理由のはっきりしない、いわくいいがたい感情があったのだろう。」(149 頁)

つまり、役柄が戦後派の快活な青年だったから実際の人間、宝田明も「チャラチャラした人間だ」と思い込んでしまうということがあったのだと思います。

それが、ねたみとなって現れたといえると思います。

宝田さんはこのことについてこう書いています。

「宏には申し訳なかったが、私は、別に人気者になりたいとか、ちやほやされたいなどという気持ちで、この道に進んだのではなかった。私にとって映画俳優とは、様々な職業の一つでしかなかった。小さな時からずっと体験してきた、生きるための食べるための仕事。

それが私にとっては俳優ということなのである。」(149頁)

様々な職業の一つでしかなかった俳優という職業によってさまざまな役を演じ表現してきたということなので、見る側の私たちは、俳優、宝田明と人間、宝田明をはっきりと区別しなくてはならないと思います。

最初、東宝の二枚目俳優としてデビューした時、満州からの引き揚げ経験を語るのは困難だったでしょう。この経験を対象化するには、時間を必要とします。まして客商売、人気商売の俳優は、なかなかこうした経験や政治について日本では発言はしにくいです。

しかし、あえてリスクを冒してでも宝田さんは、人生の後半は、政治について語っていました。実は、第五福竜丸元乗組員、大石又七氏も自分の被爆経験を語るようになるまでは、多くの時間を必要としていました。ソ連という大国に人生を翻弄された宝田さん、そしてアメリカという大国に人生を翻弄された大石又七さん。お二人ともゴジラにかかわったといっているのですが、私は、このお二人を基軸としたゴジラ論を構築していくことになるでしょう。

おわりに—宝田明最後のメッセージ

私は、宝田さんの死の2か月ほど前に宝田さんの最後の著書を入手していました。

宝田明『送別歌』(ユニコ舎,2021)がそれです。

そこには宝田さんの最後のメッセージと思われることが書いてあります。

たとえば以下の部分がそれでしょう。

「一人一人の人間の命をおろそかにするような政治は駄目です。

個のために国があり、民のために公がある。政治家は個々の人から選ばれた代表なので、嘘をついたり、不正をしたり私利私欲にまみれてはいけません。人間としての基本的な清貧とか徳と礼を尊ぶ素朴な美しき心を胸に刻んで仕事をするべきなのです。」(238頁)

「嘘をつかない」ということをわざわざ言わなければならないということが、日本社会の壊れぶりを物語っています。全体主義的傾向を強める世界の政治において「個のために国があり、民のために公がある」という認識は、ますます重要です。

「最高学府を出た政治家や官僚たちに、そういう部分が欠落している人たちが、多いと感じるのは私だけでしょうか。これは人生の最も大事な多感な時期に、詰込みの勉強ばかりやってきた歪みなのかもしれません。」(239頁)

ともいわれていますが、
そう感じているのは、宝田さんだけではないでしょう。
そして、宝田さんは、ここでこうも書いています。

「もう少し若かったら革命を起こしたいぐらいですよ」(239頁)

これは、おそらく宝田さんの本音なのでしょう。

「平和は一国だけでは作れません。満洲でコスモポリタンに育ち、戦後、日本に入ってきた外国映画によって異文化を知った私はそれぞれの民族には文化があり、共存し、助け合うことで平和は作ることができると肌で感じています。」(同上)

宝田さんにしかできないことがあると考え、そして、そこから学ぼうと考え、北京にお招きし、講演していただくと考えてきましたが、それはついに果たせませんでした。

しかしながら、宝田さんとテレビドラマで共演もしているミュージシャンの長渕剛氏は、ゴジラについて以下のように書いていることを発見しました。(石原慎太郎が、2011年3月11日の東日本大震災のとき「天罰」発言をしたとき最も怒っていた一人が、長渕剛でした。)

昭和 38 年町の映画館に
かいじゅうゴジラがやってきて

昭和 38 年
町の映画館に
かいじゅうゴジラがやってきた。
僕はびっくりした。
ゴジラが口から火を吐く時、背中からしっぽにかけて
青白い電流のようなものが走っていくのが、
たまらなく好きだった。
想像以上にゴツゴツしていて
大きくて岩のようだった。
映画館を出て家に帰ったら
熱が 39 度も出た。
僕のからだからも火が吹き出して
苦しかったけど、なんだかうれしかった。(167 頁)

長渕剛『前略人間様。－長渕剛詩画集』(新潮文庫 2001)

ここで長渕剛は、「ゴジラが口から火を吐く時、背中からしっぽにかけて青白い電流のようなものが走っていくのが、たまらなく好きだった。」と書いていますが、まさにゴジラという怪獣の最大の特徴は、ここにあります。

ゴジラが、百科事典に記述されるようになったのも、この背中からしっぽにかけての青白い光によるものです。この秀逸なアイデアを考えたのが、宝田さんの師とっていい本多猪四郎氏でした。

夜の中であって夜に抗して闘う怪獣ゴジラ。

その怪獣ゴジラの中に「破局前夜が新生前夜となり戦争前夜が解放前夜となる稀な望みを捨てない」という徐京植氏のまれな望みを見たのは私でした。

これを私からの宝田さんへの「送別歌」とさせていただきます。

そして、次が最終便となります。よろしくお願いいたします。

市民科学研究室の活動は皆様からのご支援で成り立っています。『市民研通信』の記事論文の執筆や発行も同様です。もしこの記事や論文に興味深いと感じていただけるのであれば、ぜひ以下のサイトからワンコイン（100円）でのカンパをお願いします。小さな力が集まって世の中を変えていく確かな力となる—そんな営みの一歩だと思っていただければありがたいです。

ワンコインカンパ

←ここをクリック（市民研の支払いサイトに繋がります）